

## 【参考様式3】 普及指導活動の概要

### 基本計画名

#### 「伊勢志摩の特色ある農業連携モデルの創出」

地域普及センターでは、各地域特有の課題に柔軟に対応し地域の振興につなげるため、多くの農業者や関係機関との意見交換や連携をとおして、重点的な取組を設定しています。

### 1 計画の背景（現状、問題点）

伊勢志摩地域では、伊勢平野を中心に水稻や小麦、露地野菜が、宮川沿いの中山間地域では茶、肉用牛、太平洋沿岸部では柑橘の栽培が行われています。また、イチゴは管内全域で栽培され県内有数の産地となっています。他にも、伊勢バラ、玉城豚などのブランド品目や、「きんこ」をはじめとする伝統的な6次産品も存在し、バラエティー豊かな農業が展開されています。

しかしながら、半島・中山間といった条件不利地域の割合が高く、生産者の高齢化も相まって、担い手の確保が憂慮されています。

一方、管内人口は少ないものの、伊勢神宮をはじめとする国内有数の観光スポットや、風光明媚で水産資源も豊富な鳥羽や志摩半島など自然豊かな環境・観光資源を有し、令和5年の年間入込客数は約1,082万人に達するなど、地域のポテンシャルは決して低くありません。

このため、伊勢志摩地域の農業や地域の活性化を図るには地域の特色や強みを生産の現場に生かし、柔軟な発想や工夫がより一層求められるとの視点に立ち、以下の目指すべき姿の実現に向けて取り組むこととしました。

### 2 目標（目指すべき姿）

「地域も農家も活力が湧く！」をスローガンに以下のような姿を目指します。

- ・維持すべき農地が有効に使われ景観の維持にも役立っている。
- ・規模にかかわらず目標とする売上・所得を達成し、経営者や従事者の満足感・幸福感の高い農業経営が実現している。
- ・観光や飲食など他業種との協働が進み、地域の需要に応じた価値の高い農産物が生産・供給され地域の活性化にも寄与している。
- ・農業者のみならず地域のステークホルダーが活発に情報交換・交流し、継続的に助け合いや仲間づくりを行うことができる場やシステムがある。

### 3 普及活動の内容、方法

#### <活動内容>

農業者や関係機関との意見交換をとおし地域の課題を丁寧に拾い集め、普及センター内の各担当者の横断的な連携により生産から加工・販売まで総合的な支援を行い課題解決につなげます。

活動対象は次のとおりです。

(1) 地域食材の研究	(2) 地域に即した課題解決策の検討・実践
① 地域生産食材の観光施設への提供 ア. 生産者と販路・実需者との意見交換〔全域〕 イ. 水稲県育成品種「なついろ」を活用した地域内流通の促進〔志摩市〕 ② 地域で生産され環境に配慮した食材の学校給食での活用〔玉城町〕 ③ 地域特産品の生産拡大と知名度の向上〔伊勢市「横輪いも」〕	① イチゴ低コスト環境制御装置の検討 ② 低コストハウス（イチゴ）の検討

### (1) 地域食材の研究

管内には多様で魅力的な農畜産品や6次産品が存在しますが、人口が少ないこともあり、地産地消など域内流通は限定的となっています。そこで、観光業や飲食業など農業と親和性の高い異業種との交流を促進し、新たな需要の創出やニーズの掘り起こしを行うため以下のことに取り組みました。

#### ① 地域生産食材の観光施設への提供

##### ア. 生産者と販路・実需者との意見交換

伊勢志摩青年農業士連絡協議会、農業農村青少年クラブのメンバーが、地元の食材に活用意欲がある飲食店・販売店と意見交換会を行いました。



6次産業化研修交流会

また、新たに6次産業化に向けた取組

において、地域内利用のマッチングに向けた研修交流会を行いました。

##### イ. 水稲県育成品種「なついろ」を活用した地域内流通の促進

志摩市では市内の観光施設や飲食店への志摩産農産物の供給が検討されています。このような中、栽培しやすくホテル等のニーズに合致する米品種の選定等について、令和5年度より市から県農業研究所への委託研究が開始されました。

高温耐性があり収量性が高く耐倒伏性の高い新品種「なついろ」の現地での適応性試験の実施や生産面積の拡大、地域内での流通体制の確立に向けた取組を実施してきました。

#### ② 地域で生産され環境に配慮した食材の学校給食での活用

食育推進の一環として学校給食に地場産物の使用を進めている玉城町では、令和5年度から有機栽培米の利用の検討を始め、普及センターではJAとともに参画しました。その結果、学校給食での利用に向けた新たな生産への取組と、その生産体制と流通体制の確立を進めることになりました。

### ③地域特産品の生産拡大と知名度の向上

令和4年に「伊勢ブランド」に認定された市特産の「横輪いも」について、6次産業化の取組として県立明野高校と大手量販店とのコラボによりカステラの開発・販売に取り組みました。

また、知名度向上と生産拡大を目指し、市が中心となってG I（地理的表示）の認証を目指していることから、認証に向けた支援を行っています。令和5年に認証申請し審査中です。当センターでは、横輪いもの栽培適地の科学的根拠を整理するための地質調査を実施しました。



「横輪いも」植付  
明野高校との連携

## (2) 地域に即した課題解決策の検討・実践

生産資材や燃料の高騰を背景に農業を取り巻く情勢は厳しさを一層増しており、経営体では経営の持続可能性を高めるために低コスト化やスマート農業等の先進的技術導入などの経営改善に資する新たな取組の必要性が高まっています。一方で、イチゴ栽培で就農を目指す希望者が多い当管内では、生産性向上につながるデータを活用した栽培技術のほか初期投資の抑制へのニーズが高まっています。

そこで、意欲ある生産者同士や課題に精通したメーカー、事業者、研究機関等との検討会や研修会を行い、地域の状況に合わせた技術導入や経営改善を進めるために、以下のことに取り組みました。

### ①イチゴ低コスト環境制御装置の検討

伊勢イチゴスマート農業研究会（JA伊勢いちご部会内の生産意欲の高い若手中心の組織 22名）では、ハウス内の環境制御装置の有効な利用を検討しています。その取組の一つとして、地元高等専門学校や企業の協力を得て低コストな環境制御装置を試作し、現地ハウスでの導入を検討しました。また、新たに灰色かび病害対策の強化に向けて結露判定装置の実証を開始しています。

### ②低コストハウス（イチゴ）の検討

新規就農者を中心に資材の高騰によりビニールハウスなどへの初期投資が経営を圧迫しており、低コストなハウスの産地への導入に向けて、ハウスを扱う業者との意見交換を行いました。また、他県では建設資材を使ったハウスの研究が進んでおり、その先進地である広島県の農業研究所を視察しました。

## 4 成果及び成果を上げた要因

### <活動結果・対象の変化>

#### (1) 地域食材の研究

## ①地域生産食材の観光施設への提供

### ア. 生産者と販路・実需者との意見交換

意見交換会・研修会をとおり、流通販売関係者等とのつながりが広がり生産意欲の向上や商品開発力の向上に結び付きました。

### イ. 水稲県育成品種「なついろ」を活用した地域内流通の促進

志摩市において令和6～7年度にかけて「なついろ」の現地での適応性試験を実施し、令和7年度には、地域で生産される「コシヒカリ」と比較し高収量、高品質の生産結果が得られました。

農家による栽培実証試験も5ha規模と大がかりなものとなったほか、次年度の現地生産に向けた「なついろ」栽培の取組体制が明確化されるなど、研究段階から現地定着へと着実にステップアップしています。



「なついろ」

## ②地域で生産され環境に配慮した食材の学校給食での活用

まとまった量の確保が難しい有機栽培米に代わって、『みえの安心食材制度』に基づき玉城町で生産された米の活用を目指しました。その結果、4名の生産者で栽培が行われることとなりました。また、より特徴的な取組となるように県育成品種の「結びの神」(三重23号)を選定しました。栽培に当たり、みえの安心食材制度の認証取得支援、圃場巡回、生育調査等の技術的支援を行いました。

令和6年には1.2haで栽培され、学校給食使用量の約1/3に提供されました。その後のさらなる検討で生産流通体制が確立され、令和7年度の栽培面積は倍増の2.8haとなっています。

## ③地域特産品の生産拡大と知名度の向上

「横輪いも」のG I認証は現在も審査中で、審査に必要な資料作成を伊勢市と連携し継続的に取り組んでいます。また、生産安定に向け、実証圃の設置を通じて栽培方法の改善を進め、栽培指針の見直しを行っています。



「横輪いも」実証圃場

## (2) 地域に即した課題解決策の検討・実践

### ①イチゴ低コスト環境制御装置の検討

かん水・CO<sub>2</sub>・暖房の制御の連動装置の現地実証を実施しましたが、制御装置の作動不良等もあり十分な評価が得られず、現地への導入は難しい結果となりました。

一方で、取組を通じて参加農家の課題解決意欲が高まったことから、新たに、環境モニタリング装置を活用したハウス内環境の改善による灰色かび病の発生抑制と生産性の確保に向けた実証に取り組むこととなりました。



環境モニタリング装置

## ②低コストハウス（イチゴ）の検討

イチゴ栽培を開始するにあたり、新設で 10a 規模のハウスを建設した場合に約 2,000 万円、高設栽培システムに約 800 万円の費用がかかります。建築資材を活用したハウスについては、既存施設との汎用性や資材加工面などのから導入コストの低減は難しいと判断されました。

新規就農者の定着に向けて、引き続き既存ハウスの再利用や事業等の活用など、初期投資の削減に向けたハウスの低コスト化への取組を継続していく必要があります。

### <目標と実績>

指標項目	令和 4 年度	5 年度	6 年度	7 年度	8 年度
	現状値	目標値 実績値	目標値 実績値	目標値 実績値	目標値 実績値
連携活動事例	—	1	2	3	4
		1	2		

### <成果を上げた要因>

各種取組の推進に当たり、それぞれの対象となる農業者や各種組織・関係機関との連絡調整や素案の検討を綿密に行いました。また、主体となる対象との取組検討や進捗状況の確認を実施することにより、目的・目標が明確となりました。さらに普段の普及現場における活動の中からの新たな課題の発見や気づきが、地域課題への取組の発掘につながり、成果へと結びついています。

## 5 残された問題点及び今後の取組

### (1) 地域食材の研究

#### ①地域生産食材の観光施設への提供

##### ア. 生産者と販路・実需者との意見交換

各組織や生産者への継続支援と新たな取組への検討を行います。

##### イ. 志摩市水稲「なついろ」

令和 8 年産においては、生産拡大や新規栽培の生産者への栽培指導を行うとともに、志摩市の地域流通体系の確立に向けた支援を行います。

#### ②地域で生産された環境に配慮された食材の学校給食での活用

圃場巡回・生育調査により農家に経営的メリットのある栽培体系の確立を図るとともに、学校給食米使用率 100%を目指すために栽培品種の変更も含めた推進戦略を検討します。

#### ③地域特産品の生産拡大と知名度の向上

引き続き G I 認証に向けた支援を実施するとともに、認証取得後の生産体制の拡大と産地振興戦略の構築につながる活動を行います。

## (2) 地域に即した課題解決策の検討・実践

### ①イチゴ低コスト環境制御装置の検討

環境制御装置は製品の品質確保に課題があることが改めて判明しました。今後は「グリーンな栽培体系加速化事業」を活用し、圃場内で安定して使用できる測定装置の試作に取り組みます。

### ②低コストハウス（イチゴ）の検討

パイプハウス標準仕様の作成については、引き続き各メーカーからの建設コストの確認を継続しながら、低コストハウスの仕様書の完成を目指します。

## (課題名) 水稻品種「なついろ」導入による地域水稻生産の安定と供給体制の構築

伊勢志摩地域農業改良普及センター

**活動対象** 生産者 6 名、志摩市、農業研究所、JA 伊勢、米穀業者、飲食・観光業者

### 1 背景とねらい

伊勢志摩地域では農業者の高齢化と担い手不足が進み、耕作放棄地・荒廃農地の増加が深刻で、県平均の約 3 倍に達している。農業の持続性を揺るがす大きな課題となっている一方、年間約 1,082 万人の観光客を背景に、観光業や飲食業からは「地元産米の安定供給」への強い要望がある。

こうした状況で注目されたのが新品種「なついろ」である。高温耐性、多収性、倒伏・病害への強さに加え、登熟特性や品質にも優れるため、安定生産と地域需要に応える有望品種として導入を進めることとした。普及活動を通じて生産基盤を確立し、関係機関連携による新しい農業モデルの構築を目指した。



### 2 活動内容

#### (1) 研究所による実証と成果の整理

農業研究所が地力マップや自動給水などスマート農業技術の実証を行い、収量増加など一定の効果が確認された。栽培マニュアルを整備し、水管理・病害虫防除・施肥管理などの巡回指導を実施してきた。農業者の関心は「現場で実感できる成果につながる技術」に向けられ、従来の常識にとらわれない栽培法の導入が模索された。

#### (2) 農業者の参画拡大と挑戦的栽培

令和 7 年度には 6 名の農業者が計 5ha で取組を行い、普及センターが現場の中心となった。施肥量を増やす「多肥栽培」や中干しを省略する「無中干栽培」を実施した。これにより収量や品質において顕著な成果が確認され、農業者の実感として「経営に直結する効果」が得られた。

#### (3) 現地巡回と情報共有

出穂期や収穫期には関係機関合同で現地巡回を実施。収量・品質データを収集し、結

果を農業者・関係機関と共有した。研修会を通じて新技術や成果を広め、地域内での普及体制を整備した。

#### (4) 需要者への働きかけ

精米サンプルをホテルや飲食店に提供し、アンケート調査を実施。70%以上が「良い」と回答し、80%が「利用したい」と意欲を示した。試食会では「粒が大きくつやがある」と好評を得て、地元米穀業者が一括集荷に乗り出し、ホテルや旅館との取引交渉も進展した。



### 3 活動成果

#### (1) 生産面での成果

令和7年度は平均収量 591 kg/10a、最高 655 kg を記録し、全量が 1 等米として出荷された。従来のコシヒカリ (420~480 kg/10a) と比較して明確な優位性を示した。買取価格も評価されていることから、慣行対比で十分な経済性も見込まれる。

#### (2) 農業者の意欲向上

「これほど収穫できたのは初めて」「来年は本格的に作りたい」といった農業者の声が多数寄せられ、作付拡大意欲が高まった。

#### (3) 流通・販売面での前進

米穀業者からは「全量 1 等米で収量も多く販売上の魅力が大きい」との評価があり、販路拡大に向けた取組が進展した。観光・飲食業者との商談が始まり、地域内流通モデルの実現可能性が高まった。

品種	収量 (kg/10a)	収量 (俵)	1俵あたり価格	10aあたり売上	コシヒカリとの差額
なついろ	591	9.8	31,000円	304,800円	+79,800円
コシヒカリ	450	7.5	30,000円	225,000円	—